

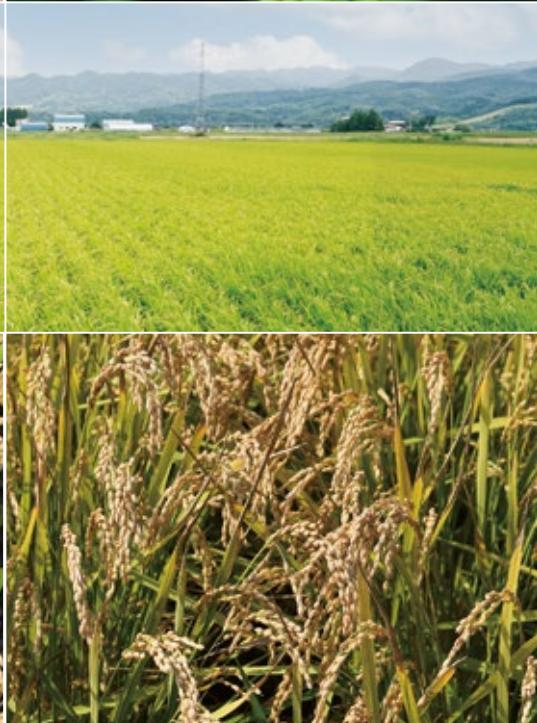
ゆめぴりかの

2 0 2 6

巨匠たち

良質米生産の
ノウハウを公開

ゆめぴりかの巨匠が



状況に応じた細やかな育苗管理と水管理

土壤中の石が多く、中山間地という難しい土壤条件のなかでも高品質なゆめぴりかを生産し続ける木谷さんは状況を観察し、細かく管理することを大切にしています。

**ゆめぴりかの
巨匠** 増毛町
木谷 辰彦さん

●水稻作付面積：約15ha（ゆめぴりか10ha、ななつぼし5ha）、他にさくらんぼとそば合わせて約15ha ●就労人数：雇用者2名、繁忙期はパート従業員を入れて約10名超



苗の顔を見て語り合うように
育苗管理しています

木谷さんへのインタビューは以下の2次元コードから全長版をご覧いただけます。

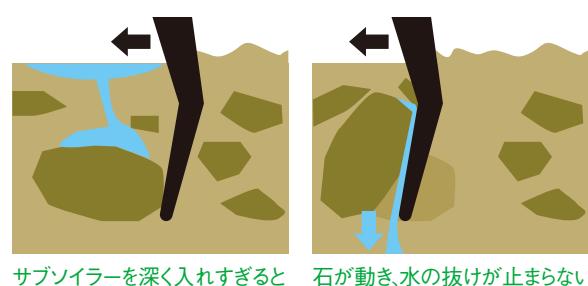


POINT

地域の特性に対応した管理しやすい圃場づくり

圃場は中山間地域で傾斜がきつく、一枚あたりの面積が限られるため、効率的に軽トラックで管理できるような圃場にしています。また、河原が移動したような石が多い地域のため、深く掘ると石が動き、暗渠管の下に水が抜けてしまいます。そのため、秋にサブソイラーをかけすぎると地下浸透が激しくなり、水が止まらなくなることも。心土破碎の加減は難しいですが過去の経験に基

づいて作業をしています。



※本冊子のノウハウは個人の見解に基づくもので一般に該当しないケースもあります。

POINT**溝切りで水の出し入れを細かく管理**

田んぼを乾かすための水管理を重視しています。基盤整備後年数が経つと水はけが悪くなるため、秋の作業が大変です。2024年は高温障害や白未熟米（シラタ）を避けるため、遅くまで水を入れていた結果、倒伏に悩まされました。そのため、溝切りを行い、水の出し入れを細かくコントロールしています。

**POINT****施肥は基肥と側条施肥のみ**

標準量を基肥と側条施肥で行っています。圃場ごとに出来の良い場所と悪い場所が顕著に見られるため、均一な収量を目指して分肥を行いたいと考えていますが、果樹の作業時期と重なるため、タイミングを逃しがち。しかし、結果として窒素分が抑えられ、低タンパク米が収穫されているようです。

**Q**

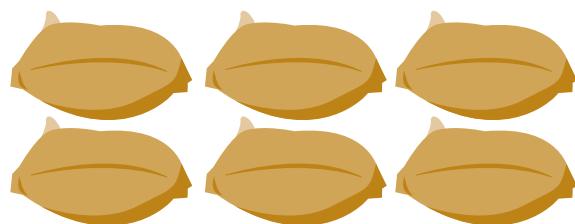
気温変化へは
どのように
対応してますか？

**A 春は作業優先。高温対策には川の水を活用しています**

春作業は天候次第になります。天候が悪い日が続くと作業ロードマップを考慮し、無理をしてでも水を入れる時もあります。高温対策については冷たい川の水を入れることで温度を管理することが重要だと思っています。

POINT**苗の顔を見ながら語り合うように管理**

優良な苗を育てるためには、芽出しの段階で芽を揃えることが基本です。具体的には、ハトムネから少し切れた状態が理想。芽出し器に入れるまでの水に浸す期間や、前年の出来によっても穂の発芽の勢いが異なるため、発芽のタイミングには常に細心の注意を払っています。密苗なので生育ムラにならないよう、状況を見ながら肥料を入れ、田植えまでに苗を仕上げていきます。作業をルーチン化せず、育苗期間は細かな点にも注意し、苗の顔を見て語り合うように管理することが大切です。



ハトムネから少し切れた状態に芽を揃える

POINT**密植により分けつを減らし親穂で取る**

田植えでは株間を狭く植えています。株が密集すると抑制されて分けつが減りますが、親穂で取った方が食味がいいという教えを守っています。今年は苗が少し足りなくなり広げた圃場もありましたが、きっちり85株/坪とかなり多めに植えたので低タンパクになると期待しています。



圃場をしっかり見ながら深水と中干しを行う

「教科書通りにやっているだけ」と語る山本さん。どんな時にも決して手を抜かず、きめ細かな作業を淡々と行う山本さんを支えているのは米作りへの情熱でした。

ゆめぴりかの
巨匠 由仁町
(株)山本農産

●水稻作付面積：8ha（全量ゆめぴりか）、他に芋・麦・大豆・大根・ニンジン・子実トウモロコシなど合わせて32ha ●就労人数：家族4人、収穫時などは最大1日5人のパートを雇用

地道に続けられる支えは
仕事に対する情熱じゃないですかね

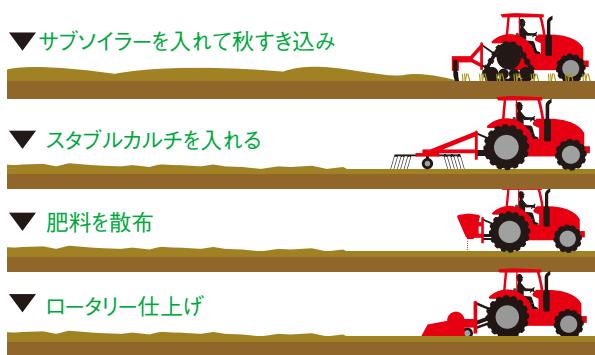
由仁町

▼ 山本さんへのインタビューは以下の2次元コードから全長版をご覧いただけます。



POINT 乾く圃場を目指して徹底して秋すき込みを実施

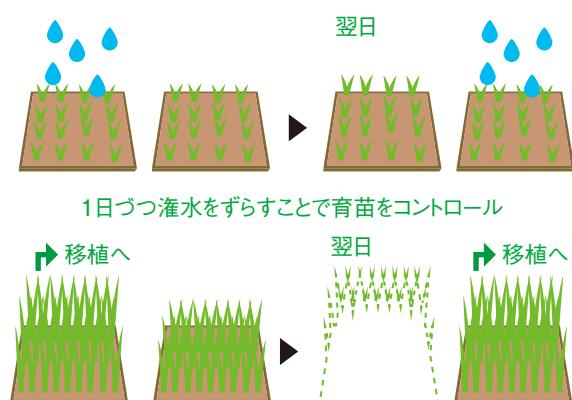
収穫後にサブソイラーを入れて排水性を良くした後、秋起こしを実施。その後、スタブルカルチを入れて、肥料散布しロータリー仕上げと基本に忠実に作業しています。稻わらの処理は秋すき込みを徹底しています。天候が悪い場合でも、クローラーを使ってすき込みを進めます。多少無理があっても秋すき込みにこだわり、作業を進め、春までに乾かします。



※本冊子のノウハウは個人の見解に基づくもので一般に該当しないケースもあります。

POINT**灌水のタイミングで育苗をコントロール**

播種は一回で行います。もちろん1日で全てを移植することはできないので灌水のタイミングをずらすことで育苗をコントロール。適期に移植できるようにしています。

**POINT****土壤分析に基づき肥料を散布**

肥料は有機肥料を昔から使っています。後はケイカルを撒いています。土壤分析は毎年実施して土壌の状態を把握しています。その結果、圃場のリン酸が高いようなので基肥でリン酸は入れていません。側条施肥でもリン酸が低い肥料を使っています。

**Q**

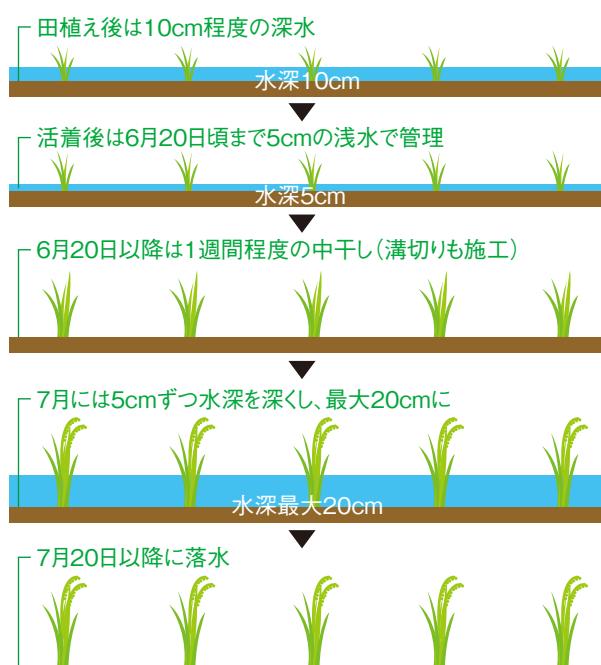
気温変化へは
どのように
対応してますか？

**A 浅水でかけ流しをすることで温度を下げています**

高温対策としては、かけ流しが有効だと思っています。暑い日に深水になると温度が高いまま、夕方には圃場の水がお湯のように温まっていることもあります。そのため気温が高い時は浅水でかけ流すことで水温を下げる高温対策をしています。

POINT**圃場をしっかり見ながら水管管理**

田植え直後は、やや深めで苗を保護。発根を確認したら6月20日頃までは水深5cm程度保ち、分けづを促します。その後1回目の中干しを行い、同時に溝切りも施工します。この時の溝切りの効果で2回目中干し時の排水は良好です。7月に入ってからは徐々に水深を深くし(5cmずつ)、7月中旬頃までに20cmにします。冷害危険期終了後の7月20日頃には落水し、再度中干しを出穂期まで実施しています。

**POINT****情熱が高品質なゆめぴりかを支えている**

当たり前のことをやっているだけですが、品質の高いゆめぴりかは偶然できるものでもないと思います。だんだん慣れてくると「まあいいか」とか「後でいいか」「やらなくていいか」となりがちです。そこを支えてくれるのは仕事に対する情熱だと思って今まで培ったものを大切にしています。

育苗時の温度管理と品質を重視した施肥設計

品質にこだわった施肥と育苗時の細かな温度管理を重視する岡本さん。高品質なゆめぴりか作りに大切なのは経験から得られるノウハウを駆使し、状況に応じて対応することだといいます。

ゆめぴりかの
巨匠 由仁町
岡本 勝美さん

●水稻作付面積：約 8.5ha（ゆめぴりか 6.5ha、ななつぼし 1ha、えみまる 1ha で、合計約 8.5ha） ●就労人数：夫婦 2 人が中心で播種時や田植えの時に最大 2 名を雇用



タンパクが高い年に低く抑えるには

これまでの経験が生きてくる

岡本さんへのインタビューは以下の2次元コードから全長版をご覧いただけます。



POINT

秋すき込みを基本に、無理はしない

圃場管理については、特に変わったことはしていません。春にしっかり乾く圃場にするため、できるだけ秋すき込みをしています。ただ、天候や圃場の乾き具合により、無理に秋すき込みはしません。乾きが悪いところはしっかり乾かしてから春にすき込むこともあります。春はできるだけ乾く圃場を目指して天気を見ながら作業を進めています。



※本冊子のノウハウは個人の見解に基づくもので一般に該当しないケースもあります。

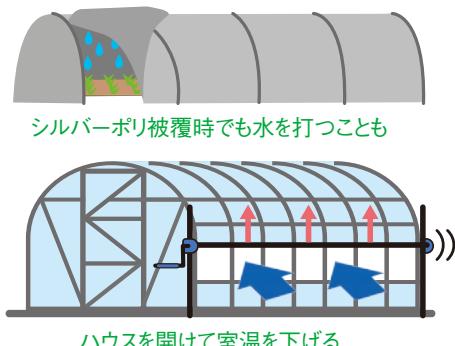
**POINT****窒素肥料を控えて品質重視の施肥設計**

低タンパク米生産のため、窒素肥料を控えめにし、追肥のタイミングと量のバランスは経験を元に調整しています。特に後半の窒素過剰はタンパクを高めるため控えますが、控えすぎると収量低下を招くため、そのバランス調整が重要です。ケイ酸資材は基肥で40kg/10aで投入。ケイ酸追肥はJAの推進と機械貸し出しがきっかけで約10年前から導入しています。幼穂形成期頃に20kg/10a施用し、葉の丈夫さや品質向上に効果あり。収量面よりも品質面で効果を実感しています。

POINT**育苗はこまめにチェックし温度管理**

育苗時の灌水は1日1回午前中に行います。育苗ステージごとの温度管理を最重視し、こまめにチェック。温度が上がった場合は、シルバーポリを一旦剥がし、水を打つなどの対応をします。出芽後はハウスを開けて室温を下げることで温度をコントロールしています。

育苗日数は成苗ポットで30日。5月20日ぐらいに田植えをしています。最近は移植時に気温が高いので根鉢よりも苗の老化を懸念し、若干若苗で移植しています。

**Q**

気温変化へは
どのように
対応してますか？

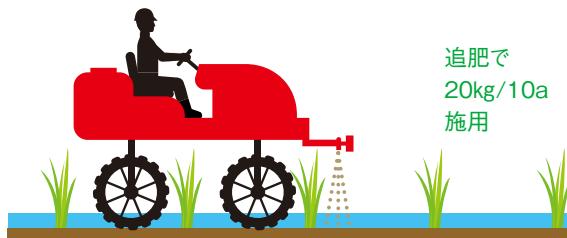
**A 冷害危険期の深水管理と高温対策としてかけ流しを行っています**

冷害危険期は徐々に深水にするのが基本だと思いますが、今年は温度が高かったので実施しませんでした。高温対策としてかけ流しを行っています。他には特に対策はしていません。

ケイ酸資材は



基肥で
40kg/10a
施用



追肥で
20kg/10a
施用

POINT**タンパクが上がる時に対処すること**

タンパクは年によって上下します。高い年もあれば低い年もありますが高い年にどう低く抑えるかということが一番大切なところです。この辺は言語化できないというか、経験が重要だと思っています。

独自の視点で施肥と栽植密度の最適解を実践

細かで手間のかかる水管理や密植、施肥など全てを「高品質なゆめぴりか」作りに賭けている原田さん。その全てが余裕を持った低タンパクゆめぴりかの収穫に結びついています。

**ゆめぴりかの
巨匠**
秩父別町
(株) 原田屋

●水稻作付面積：23ha（全量ゆめぴりか、他に麦と大豆を各130a） ●就労人数：自身と父親の2名、繁忙期（田植えと播種）のみアルバイトを最大3～4人雇用

品質を追求するためには
苦労してでも最適解を実践します

原田さんへのインタビューは以下の2次元コードから全長版をご覧いただけます。



POINT

圃場を歩いて細かく観察、状況に応じて徹底した水管理を実施

米作りにおいて水管理が最も重要と考えています。基本的に忠実に、浅水でスタートし活着と分けつを促すようにしています。その後は、ワキが出るので中干しにより乾かしてガスを抜くことで肥料の効きを良くして、秋に窒素欠乏にならないようにしています。

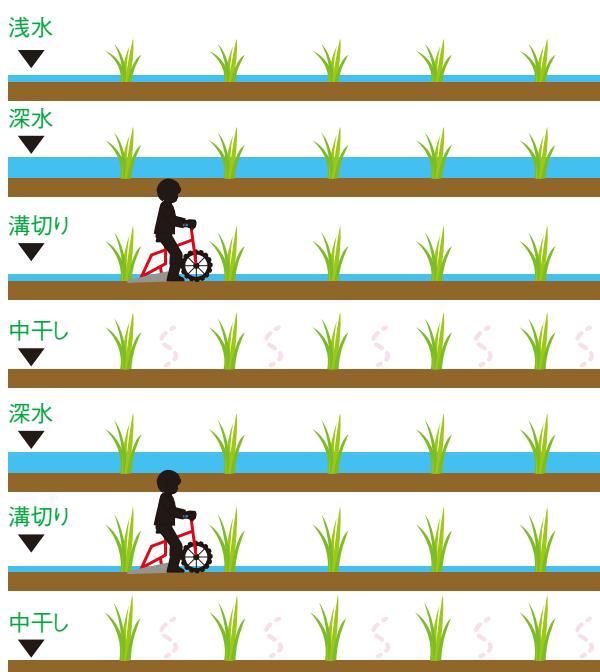
特に重視しているのは登熟期。60枚ある田んぼを毎日一枚一枚歩き、土の割れ具合や稻刈りま

での土の状態（沈み具合）を確認し、水管理を徹底しています。乾いていなければ溝切りライダーを引っ張って、暗渠から水を抜くなどで排水。収穫ギリギリまで水を入れておきたいので毎日田んぼの状態や天候、通水終了時期を考えて、水を入れるべきか乾かすべきか「胃が痛くなるぐらい」悩みながら決めています。

※本冊子のノウハウは個人の見解に基づくもので一般に該当しないケースもあります。

POINT**溝切り、中干しは重要な作業**

中干しの1回目は全ての田んぼでしっかりと行います。2回目は軽めに行っています。中干し前には溝切りをしていますが最近は溝切りをして中干しをする人が減る傾向にあります。細かな水管理をしなくても稻は育ち、収穫はできるものの、品質を追求するためには常に重要な作業の一つだと考えています。全ての作業はゆめぴりかの品質（美味しさ）に繋がっているのです。

**Q**

気温変化へは
どのように
対応してますか？

**A ケイ酸や葉面散布剤を施用、熱対策にはかけ流し**

葉の活性を維持すべく、ケイ酸資材を入れています。今年は窒素不足にならないよう試験的に葉面散布材の液肥（クロロゲン）も施用。また、用水が豊富な地域ではありませんが、33°Cを超えるような気温の時にはできる範囲でかけ流しをすることもあります。

POINT**秋すき込みは無理せず、春作業を丁寧に**

山間地のため圃場はほとんどが粘土質。乾いているところは秋すき込みを行いますが、乾いていない場合や、人手不足ですき込む時間がない場合は無理に行いません。秋すき込みができなければ、春の田起こしの時にすき込むこともあります。そのため、溝堀りや暗渠排水をほぼ毎年実施し、なるべく圃場が乾くようにしています。また、できるだけ圃場を平らにしたいと考えていますが、レーザーレベラーを使いたいものの、代かきまでの忙しさや雨の多さから、なかなか作業時間が取れていません。

POINT**低タンパクになる施肥と栽植密度を実践**

全面積で窒素量は 8.8kg /10 a（基肥 6 + 側条 2.8）で栽植密度 75 株 / 坪とすることを実践。低タンパク米を取るにはこの株数が最も適していると考えています。手間と苗箱の量は増えますが、整粒が増え屑米も減るメリットがあります。ケイ酸資材も入れており、あまり欲張らずに単収を 8 ~ 9 倍程度に抑えています。麦跡や大豆跡などの転作田ではタンパクが上がる傾向がありますが、通常の水田ではこの施肥量で 90% 以上、低タンパク米になると自信を持っています。



状況を的確に判断して細かく水管理

YES!cleanによる、ゆめぴりか作りに取り組んでいる石田さん。圃場整備から育苗管理、施肥、水管理まで画一でなく、状況を的確に判断し、きめ細かく対応する米作りを進めています。

ゆめぴりかの
巨匠 倶知安町
石田 祥二さん

- 水稻作付面積：約 16ha 弱、他に - 芋・大豆・麦が各 2ha 、ブロッコリーが 4 ~ 50a
- 就労人数：家族 3 名（夫婦+息子）、田植え期にパート 2 名雇用

・
俱知安町

新技術が発達しても
田んぼを回って見ることが重要

石田さんへのインタビューは以下の2次元コードから全長版をご覧いただけます。



POINT

水が抜けすぎないようにサブソイラーを調整して施工後、圃場を傷めないように秋すき込み

収穫後にサブソイラーを施工します。通常 3 本爪のところを、透水過剰を避けるため 1 本外した広いピッチに設定し、保水性も確保。これにより田植え時の機械安定性が向上。その後ロータリーで秋起こしを行い、稻わらを完全にすき込みます。圃場の状態に応じてサブソイラーの深さを調整。抜けすぎる場所は浅く、場合によっては実施しません。秋起こしは天候と相談し、

乾いていなければ無理をしませんが、フルクローラーのトラクターで多少の悪天候でも可能な範囲で実施しています。



※本冊子のノウハウは個人の見解に基づくもので一般に該当しないケースもあります。



POINT

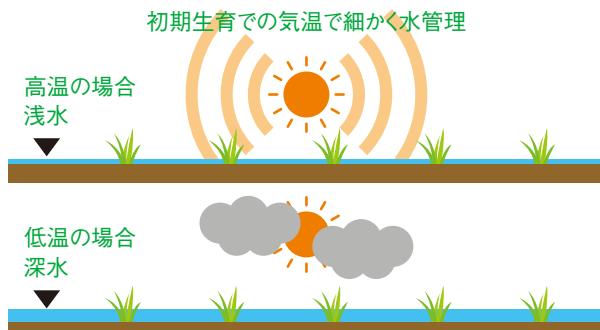
中苗化を意識して徒長を抑える温度管理

近年は高温傾向で従来のマニュアルが通用しにくいと感じています。伸びすぎ・老化苗防止のため、成苗の中苗化を意識し、育苗初期から外気にさらして温度を見ながら徒長を抑えるように管理しています。

POINT

ステージに合わせた細かな水管理

春先の激しい気温変化に対応し、田植え前は植付精度を保つために水加減を細かく調整。晴天続きで土が硬化すると浮き苗の原因になるため、「ひたひた水」を基本としつつ、風などの影響を見て入排水をこまめに切り替えています。初期生育では「暖かければ浅水、寒ければ深水」が基本。圃場は面積が広く、入排水に時間がかかるため判断が難しいですが、活着後は強風・冷え込みがなければ分けつを促進させるために浅水を心がけています。



POINT

品質重視の施肥管理

品質重視のため基肥を均一に散布するように配慮しています。トラクター散布時にはぬかるみやスリップによる散布差を減らすべく、勘を頼りに加減しながら調整し、複数回走行して施肥を均一に。基肥と側条施肥の割合は YES!clean 基準に基づき、基肥は窒素 4.2kg/10a、側条施肥 1.5kg/10a 程度。収量の目減りには基肥ではなく側条施肥を増やして対応し、後期過剰を防いで品質低下を回避しています。YES!clean の取り組みを始めてから収量と品質が安定するようになりました。

POINT

直接見ることで適切に判断を下せる

米作りのポイントは苗をしっかり育てることと登熟期の水管理だと思います。基本的な考え方は「量より質」。収量が少ない年に基肥を増やしすぎると品質が落ちるため、収量が落ちたとしても低タンパクで美味しい米が収穫できたならそれを良しとしています。

後は、ドローンなど新技術が普及しても、圃場を回り自分の目で確認することを大切にしています。結局、適切な判断には細部を直接観察することが不可欠ではないでしょうか。



Q

気温変化へは
どのように
対応してますか？



A 春は作業優先。高温対策には川の水を活用しています

高温対策として田植えを意図的に4～5日遅らせ、登熟期が高温ピークから少しでもずれるようにしています。また登熟期の高温対策も重要。高温障害を防ぐため、水を切らさないように注意し、高温が続ければ、かけ流しを行うといった水管理をきめ細かく実施しています。

最適な圃場を選定し、秋すき込みと春のケイカル投入を徹底

土壤を見て、生育状況・気温を細かく観察し「その時すべきこと」を的確に対処する佐々木さん。圃場への深い理解をベースに土質の特性を最大限に活かした栽培戦略を実践しています。

ゆめびりかの
巨匠 当別町
佐々木 健児さん

●水稻作付面積：- 米 5.6ha、麦 7.9ha ●就労人数：- 夫婦 2人が中心で、田植え期のみ母親と叔母が参加

低タンパクの鍵は
圃場の理解にあると思います

当別町

佐々木さんへのインタビューは以下の2次元コードから全長版をご覧いただけます。



POINT

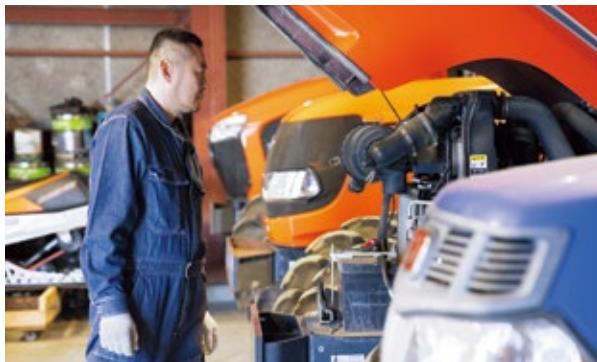
田んぼの乾きが悪くても秋すき込みと春のケイカル散布は必須

収穫後にケイカル 50kg/10a を散布。その後、圃場が乾けばサブソイラーを入れてから秋すき込みを行います。今年は天候不順で圃場が湿っていたためクローラトラクターで稻わらのすき込みのみ実施。秋すき込みは必須だと考えているので、サブソイラーを入れられない時には秋すき込みを優先しています。また、作業条件が悪く、秋にケイカルを入れられない年でも、春には毎

年必ず投入。肥料散布と同時にを行い、精密に散布しています。円滑な秋作業実施のために8月のお盆頃に水を切り、直ちに溝切りして乾燥を促進。収穫から3週間以内にすき込みができるように心掛けています。

春はゴールデンウィーク中に肥料を撒いて、田起こししたいですが、乾きが悪く、クローラトラクター2台を駆使して何とか対応しています。

※本冊子のノウハウは個人の見解に基づくもので一般に該当しないケースもあります。



POINT

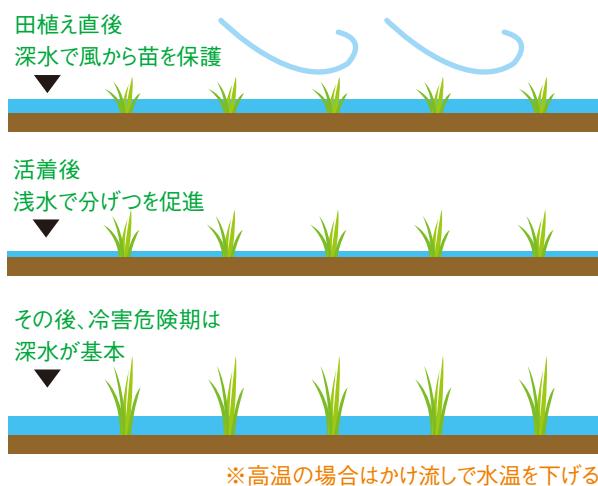
育苗では毎朝規定量を灌水

育苗期は毎日、朝 7 時とか 6 時ぐらいに規定量を灌水シャトルで水をかけます。

POINT

状況に応じて細かく水位をコントロール

基本は止水管理で水が少なくなったら入水しています。田植え直後は強風対策で深水にして苗を保護し、活着後は分けつ促進のため浅水。水深で地温・水温を調整することが初期生育で重要だと思って水管理を細かく行っています。ワキがなく透水性が良いので、中干しは実施していません。冷害危険期は深水が基本ですが、FAX で入手した営農情報に基づいて細かな水管理を実施しています。



Q

気温変化へは
どのように
対応してますか？



A 暑さ対策はかけ流し、暑さで増えたカメムシ対策も

湛水状態を保持し、暑さに応じてかけ流しを実施しています。水管理に加え、カメムシ防除も殺虫剤を他品種より 1 回多く散布。高温時の出穂を避けるために、早生品種の田植え時期は収穫から逆算して調整しています。

POINT

重要なのは圃場の選定

低タンパク化の鍵は土質だと思います。国道 337 号線沿いの粘土質圃場はタンパク値が低くなる傾向があり、ゆめぴりかはこの特定圃場（全体の 15% 弱）のみで栽培しています。泥炭地は収量は多いもののタンパク値が上がるため、ゆめぴりかの作付けはしていません。

側条施肥は 30 年以上前から導入し、初期生育向上を実感しています。基肥 2、側条 1 という割合で施用しています。コスト削減のため BB 肥料を使用していますがタンパク値への影響はなく、昨年は 5.9 と低タンパク値を記録しました。



POINT

近隣圃場に配慮したカメムシ対策

害虫対策として畦草刈りを頻繁に行っています。また、近隣に無農薬栽培圃場があるため農薬の空中散布は行わず、地上からのナイアガラ散布で対応しています。



乾く圃場づくりとケイ酸資材の投入が米作りを変えた

就農時にタンパク値の高かった米。長年に渡る創意工夫で低タンパク米を安定的に出荷できるまでにした石崎さん。共に育苗を行う6人の仲間と意思を統一して妥協せずに米作りをしています。



むかわ穂別町
石崎 憲一さん

- 水稻作付面積：水稻約23ha、かぼちゃ18.5ha、メロン1.5ha、野菜・果物系が約1.5ha
- 就労人数：家族5名、外国人技能実習生3名、繁忙期は1～2名パートを追加して対応

第61回
(令和5年度)
**北海道優良米
生産出荷共励会
移植栽培部門 個人の部
最優秀賞
受賞者**



乾く圃場づくりとケイ酸資材

経験から学びは大きいと実感しています

むかわ穂別町

石崎さんへのインタビューは以下の2次元コードから全長版をご覧いただけます。



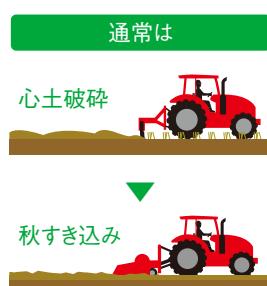
POINT

最適な圃場を選択し、乾く圃場づくりを第一に進める

乾く圃場作りを最も重視しています。一番効果があるのは暗渠をこまめに施工し、排水性を高めること。秋には心土破碎とすき込みを実施すること。但し、今年は秋の天候不良で、秋すき込みが難しいため、冬の雪上心破と春に溝切りを行う予定です。乾く圃場づくりにはすき込みよりも排水を第一に考えています。

特にゆめぴりかは、地力の高い場所を避け、乾

く圃場を選択して作付けしています。

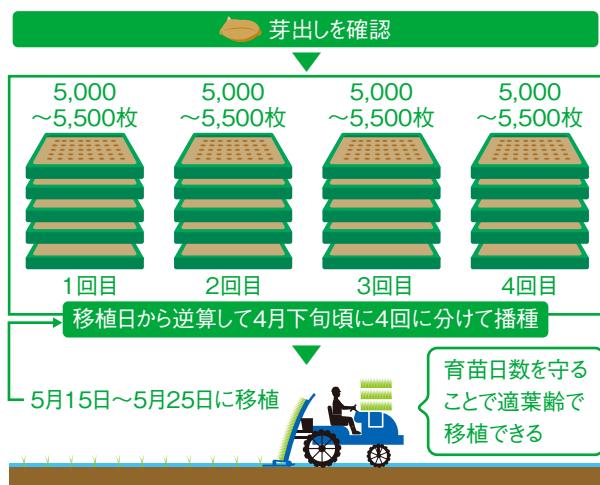


※本冊子のノウハウは個人の見解に基づくもので一般に該当しないケースもあります。

POINT**出芽を揃え、健苗を早めに移植**

苗は稚苗を用いており、6戸で共同育苗を行っています。稚苗にした理由は、箱枚数が少なく、コストの低減と移植作業の効率化を図れるため。良い苗で移植ができるよう、仲間の間で共通認識を持ち、当番制で管理しています。良い苗に仕上げるには、育苗日数を守ることと移植適葉齢を超えないことが重要だと考えています。

移植作業は5月15日から始めますが、出芽室でしっかり出芽を確認してから育苗ハウスに設置するようにしています。移植が遅れるよりは、スケジュールを優先し、なるべく適期より早く終わるように意識しています。

**Q**

気温変化へは
どのように
対応してますか？

**A 高温対策はかけ流しではなく、水の入れ替え**

高温による乳白米・胴割米の発生を懸念しています。対策としてかけ流しではなく、夜も水を張り、温度上昇が見込まれる際は新しい水に入れ替え。個人ポンプで取水しているため苦労はありますが、水不足で困ることはありません。

POINT**基本に準じた水管理を実施**

移植後から生育に応じた水深を保つようにしております。ワキが出た時には中干しも行っています。冷害危険期頃は徐々に水を深くし、出穂以降の高温時には夜間の温度を下げるため、水を切らさず時々水の交換も実施しています。

POINT**ケイ酸投入による効果を実感**

側条施肥は初期生育の確保に有効なため、基肥と側条施肥の割合が1:1になるように調整しています。また、ケイ酸は稻にとって重要な成分と考えているので、融雪効果も兼ねて2月下旬～3月上旬にケイカルで100kg/10aを散布しています。結果として稻が硬くなり倒伏軽減やタンパク値の低下といった効果を感じています。

**POINT****乾く圃場とケイ酸資材が高品質米の鍵**

長年の高品質米生産の最大要因は「乾く圃場づくり（暗渠整備、乾土効果）」と「ケイ酸資材の積極投入」だと思っています。これらの実施により就農当初は高かったタンパク値が安定して低下しています。

ゆめぴりかの巨匠が持つ実践的ノウハウをあなたの米作りに

「北海道米の新たなブランド形成協議会」では
2015 年より高品質な「ゆめぴりか」を生産された方を対象に
「ゆめぴりか良質米生産出荷表彰」を行っております。
中でも、10 年間連続で高品質なゆめぴりかを生産された 9 名の方を対象とし
新たに「ゆめぴりかの巨匠」の表彰区分を設け
9 名の方が受賞されました。

今回、ご賛同をいただいた「ゆめぴりかの巨匠」7 名の方に
「良質米生産のノウハウ」をお聞きし、1 冊にまとめました。
「ゆめぴりかの巨匠」たちが実践しているノウハウをぜひ、
皆さまの良質米づくりにご活用ください。



①
増毛町 木谷 辰彦さん………… 1p
状況に応じた細やかな育苗管理と水管理



⑤
俱知安町 石田 祥二さん………… 9p
状況を的確に判断して細かく水管理



②
由仁町 (株)山本農産 ……………… 3p
圃場をしっかり見ながら深水と中干しを行う



⑥
当別町 佐々木 健児さん………… 11p
最適な圃場を選定し、秋すき込みと春のケイカル投入を徹底



③
由仁町 岡本 勝美さん………… 5p
育苗時の温度管理と品質を重視した施肥設計



⑦
むかわ穂別町 石崎 憲一さん… 13p
乾く圃場づくりとケイ酸資材の投入が米作りを変えた



④
秩父別町 (株) 原田屋 ……………… 7p
独自の視点で施肥と栽植密度の最適解を実践

ゆめぴりかの巨匠とは
「ゆめぴりか良質米生産出荷表彰」において、10 年連続「優秀表彰」受賞生産者を「ゆめぴりかの巨匠」として 2025 年より表彰しています

